

禅寺丸の思い出

禅寺丸林は日本最古の甘柿といわれ、鎌倉時代、順徳天皇の建保2年（1214年）に王禅寺の星宿山蓮華院再建に際し、山中に自生しているものを発見したことから「禅寺丸」という名が付けられたのが始まりといわれています。

旧社屋の正面玄関に堂々とそびえ立っていたこの柿の木は、創立当時既に240年を超える大木でありました。

秋には一面に赤い実を突らせ、その柿の実はいわゆる我々の口に入る数よりもカラスの餌になるか地面に落下してしまう数の方が数倍多かった気がします。味はといえばなかなかの美味で、砂糖の茶色の結晶がびっしりと入った自然の甘柿でした。亡き会長が無類の柿好きで、よく食べ頃に突った柿を休日に山ほどもぎ取り、社員の私達は袋一杯にもらって帰ったものです。

春には新芽の緑をびっしりと蓄え、夏には実りを約束する花が散り、秋には丸々と太った実を結ぶ。そして晩秋には頑張った葉（葉）をたたみ又来る春のために根元を肥やす…

その歳月の流れは会社の営みにも似て感慨深いものがありました。

毎日あたりまえのようにこの柿の木の下を歩いていた私達ですが、この見上げるような大木の影にいつも見守られていたようにも思えてきます。いい時代も苦しい時代も共にし、笠原の歴史を誰よりも鮮明に記憶してくれたそんな大木は、社歌にも登場し永遠に笠原の守り神としてこれからも生き続けます。



2009年の秋移転に伴い伐採
(樹齢およそ280年)